

地域住民の感謝の声や 感心を寄せる姿に、 「道路づくり」の大切さを感じる日々



北海道開発局 札幌開発建設部 札幌道路事務所
第1工事課 第1建設係 堀越 弘美さん

目立ちたがり屋精神で、 造るんだったら大きなもの

小学生の時、建材メーカーに勤める父親の会社で製図用の机を見て「面白いな。大人になったら、こんな机を使う仕事をしてみたいな」と思ったという堀越弘美さん。出身は栃木県で、高校選びの基準を「家から近いこと」と、自転車で10分程度の高校に入学したところ、そこは県内有数の進学校。国立大学への進学も、ごくごく自然の流れだったそうです。

製図用の机のイメージがずっと心に焼きついていたため、建築学部のある大学へ進もうと受験勉強に励み、ターゲットは「行くなら日本の北か南」。そんな理由から平成8年4月に18歳で室蘭工業大学へやって来ました。友人たちは「わざわざ北海道へ行かなくても、東京にだってたくさん大学はあるでしょう」と首を傾げたそうですが、とにかく堀越さんは北を目指しました。

10代で目指してやって来た北海道は、国道にも野生の鹿が出現する自然豊かな環境です。生まれ育った関東圏との様々な違いに、最初は随分驚きましたが、気がつけば“北の大地”が第2の故郷。間近に白鳥大橋が出来る様子を見てから、スケールの大きさが、人生の舞台を選ぶ尺度になりました。

大学3年になると建築か土木のどちらかのコースを選ぶことになり、「子供の頃から目立ちたがり屋だったこともあり(笑)、どうせ造るなら橋や道路のようにドカーンと大きなものを造ってみたいと思ったんです。また大学在学中は室蘭で白鳥大橋の工事が進行中で、海をまたいでスケールの大きな橋が出来ていく様子に大変興味を持ちました。ですから、20歳前後で、わたしは土木の世界で生きていこうと決心したわけです」と、屈託なく笑います。こうして自分の進むべき道を定め、大学、大学院では構造系の勉強をし、北海道開発局に就職しました。

苗穂交差点の4車線化供用へ。 東橋の整備中にファン(?)現る

最初の勤務地となった釧路では、雄大な釧路湿原が広がる風景に、本州で育ったこともあり、ただ、ただ感動するばかり。また一般車両が走る道路で野生の鹿

を見ることもたびたびで「さすが北海道」と、当初はとて驚いていたそうです。

釧路には5年間おり、入局1年目から道路工事の現場で様々な仕事にたずさわり、整備計画にも参加。有識者の意見に耳を傾ける機会も増え、自然に対する認識も深まりました。また時には、事前に調査したにもかかわらず、現場近くの豆腐屋さんが水を引くためにパイプを埋め、それが地中から突然現れ対応に追われたことも。こうして釧路での経験をしっかり自分の肥やしに、次の勤務地である札幌へ。札幌では混雑解消のキーポイントとなる国道12号、275号の苗穂交差点の4車線化や、老朽化した東橋の架け替え工事に取り組んでいます。

「東橋は平成16年度から、まず片方を解体して新しい橋を造り、もう片方の解体、及び施工にかかっているとところ。釧路ではほとんど民家のないような、山中での仕事もけっこうさせていただきましたが、東橋周辺の場合は住宅もあり夜間作業には気を使いますね。多くの方に見守られての工事ですが、ご近所の年配の方が毎日のようにいらしては、土手に腰掛け作業の様子をずっと眺め“北京オリンピックもいいけど、毎日、どんどん変わっていく橋の工事面白いね。”とおっしゃっていました」と、エピソードを紹介。こうした地域住民の理解も大切になってきます。

4車線化になってからは、自らもハンドルを握り通過してみましたが、以前に比べずっと走りやすくなり「いい道路になった」と、当事者でありながらも、喜んでいるドライバーの一人です。

何気ない感謝の言葉に、 喜びと充実感を覚える

仕事をしていく上で特に女性であることを意識したことはなく、「住民説明会で少しは場を和やかにできているのかもしれませんが」と控えめな発言。また仕事である以上、しっかり説明していかなければならない場面もありますが、以前「うちの主人が、堀越さんのことをきかない女だなんて言ってたけど、あなたにも立場があるんでしょ」と、奥さんからそっと囁かれた時は少なからずショックを受けました。しかし、そんなことにへこたれることなく職務を全うしています。もちろん、嬉しかったこともたくさんあり、高齢



札幌道路事務所

の女性から「この道路が出来て、病院に行きやすくなり、本当に助かってます」と、感謝の言葉もらった時は「道路づくりの重要性」を、心から実感したそうです。

休日でもアイスクリームを食べていると、ふと「原料の牛乳は、わたしが関わった道路を通ってきたのかしら」と、ついつい仕事のスイッチが入ってしまうという堀越さん。住み始めて14年となり、もはや第2の故郷となりつつある北海道で道路事業を通して、喜びへとつながる出会いを増やしていきたいそうです。



平成22年2月現在の東橋